
ブラックバブー

綿飴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックバブー

【Nコード】

N9851F

【作者名】

綿飴

【あらすじ】

それは果たして良かったのか、悪かったのかその時の彼はまだ何も知らなかった。

プロローグ

黒、赤、青、緑、黄、紫

豊富な色を有した人々に囲まれながら、私は2001年1月1日の午前1時25分丁度に生誕致しました。

朦朧としていた意識がはつきりと芽生え始めたのは今から1時間程前。仄暗い部屋の中で白衣を纏った多勢の医療スタッフさん達に囲まれて、各人様から励ましの御声を頂いていた時です。皆さんの取り取りなお顔は、とても喜びに満ち溢れているようでした。

ですが、暫くするとその医療スタッフさん達は用がお済になられたのか各自退去していきまして、現在室内には私の他に2名程しかおりません。私と私の生みの親である母。そして恐らくはその親類と見受けられる老婆です。

母の名は確か……皆に智子ちこと呼ばれていました。智子さん……とても良い名前です。私も早く母の良い名に見合う素敵な名前をつけて頂きたいものです。

私は一時思考を中断すると、部屋の様子を確認する為、先刻からずっと閉じていた目をゆつくりと開いていきます。病室内である事は鼻腔を擽る薬剤の香りからも、寝かされているベッドシーツの感触からも、優に想像できたのですが、私の生まれた場所がどのような趣なのか、今すぐにでも知りたかったのです。

しかし、私が重い目蓋を見開いたその直後、室内の冷ややかな外気が吹き付けてきて、その目を強く刺激していきました。

(うおっ——！)

私はそれで咄嗟に目を瞑ろうとしたのですが、どれだけ力を込めようとも何故か目玉が思うように動かせません。私の意志とは無関係に繰り返し開閉を続けています。

（眼筋がまだ発達していないのでしょうか？）

不思議に思いつつも何故か無理矢理そう納得してしまった私は、暫し目を潤ませながら再び室内を見渡します。

すると見えてきたのは、薄っすらと橙色の明りを纏った病院の一室。本来の部屋の間取りよりも若干広々としていたその室内は病室の中とはいえ、どこか懐かしい風情を感じさせてくれました。

真っ白な天井に余す所無く引かれた網模様の窪み線。そこに金属針で吊るされた蛍光灯は既に消されてしまった様で、無機質な輪郭のみを浮き彫りにしています。そしてこの室内を照らす橙色の灯りはどうやら頭の上から伸びていたようです。

私の目玉がまだ小さいせいか、他に目に見えて分かる物はありませんでした。

しばらくの間、そんな変わり映えのしない病室の中を眺めていると、少し離れた場所から母と老婆の潤み声が近づいてきました。

「おめでとう、よくやったわねえあんた……偉いよ」

「うつうつうつ」

嬉し涙の類いでしょうか。私はとても気になりました。

……どうせここで、こうして仰向けに寝ているのも退屈だったので。折角ですから即時に見物と洒落込ませていただきましょう。

私は自身の目玉をぐるりと一周させながら、近くにいるであろう母達の姿を探します。ですがいくら見回しても母達の姿が見つかり

ません。

(……この位置からではよく窺えないようですね。今度は近づいてみましょう)

静かに一呼吸し、未熟な四肢にひたすら力を込めてゆきます。

(ふんぬつつ——！)

更に全身全霊で力を込めると、私の身体は一思いに立ち上がりました。すると見る間に視界は拡がり出して、今迄見えてこなかった病室の全容が目飛び込んできました。

四方を囲っている飴色の鉄格子付きベッドとその脇にあるステンドレスの置棚に乗せられたウサギと亀のぬいぐるみ。隙間の開いたドアの内面には、パン星人の絵が描かれたポスターが貼り付けられ、更に自身の足元には小さな猫のぬいぐるみのようなものが置かれています。

(ぬいぐるみだらけですね……まあ仕方ないのかもしれませんが)

室内を粗方見渡し、目的の二人を見付けられなかった私は、少々困惑しながらも再び床につこうと膝を曲げました。

すると突如、窓辺の隅で伏せる様に座り込んでいた人影がごそそと動き出したのです。

「え……………」

「あーりゃまあ——！」

鉄格子が二人を隠していたようで、見落としていたようです。立ち上がり私を凝視する母と老婆。ようやく二人の顔を拝む事ができました。

栗色の髪の毛を後頭部で結わえ、白い地味なパジャマに身を包んだ母は、どこか幼さの残る少女の様な顔立ちをしています。その隣で、皺だらけの顔についた目を大きく開けた老婆は、白髪の頭を銀色の髪留めで束ね、どこか母に似た面影を残しています。

「^{みやと}宮人……？」

（私の名前は宮人と、もう名付けられていたみたいです。準備が早いですね）

未だ呆然と立ち竦^{すく}みながらもはつきりと、私の名を呼んでくれた母。さぞかし苦しい思いで私を生んだのでしょう。母の額から幾つもの汗が滴り落ちているのが、薄暗い病室の中でもはつきりと見て取れました。故に、私はその母に多大なる感謝の一声を捧げるのです。

「ありがとうございます——！」

1月一日午前3時未明、静寂漂う都内××大学病院の一室で、女

性のおぞましい叫喚が長時間に亘り響き続けた。

第1話

「ばあーばあーばあー」

明朝に光輝く日差しの群が隠微に開いた窓の隙間から、春の香りを含んだ心地よい温風と共に流れてきます。私の憶測ですと現時刻は恐らく午前の6時前後でしょう。眠りについてからまだ3時間程しか経っていませんが、眠気は一切感じられませんでした。赤子の寢覚めはいつの世も早いものなのでしょう。

（寢覚めが早いだけならば申し分ないのですがね……）

現在この病室には、私一人しかおりませんでした。夜中の一件で私の親類に当るべき者達は皆早々と立ち去ってしまい、その後独り病室に取り残された私は渋谷と眠りにつく事にしたのです。

それから僅か3時間ばかりの間。本来ならば新生児の場合必ず誰か一人は、大人の方を近くに置いておくものであると私は認識していたはずなのですが、何故かそれ以降一度たりとも来訪者なる者は訪ねて来なかったのです。病院の朝と言いますと常に騒がしいものだという印象があったのですが、この病院に限っては違った様です。故に本来であるならばこの室内は、とても閑散としているはずでした。

終始、私の耳を打っていた単調な時計の音。窓の外から微かに響く小鳥の囀り。稀に聴こえてくるのは、ドア向こうの廊下を叩くテナポの良い靴音の数々。静寂を好む私にとって、朝はすこぶる優雅な一時でもあるのです。

しかし、今最も盛大に聴こえている音は、愛しむべき朝の静けさを非道にもぶち壊す、私自身が発していた鳴き声だったのです。

「ばあーつぶおーおーばあーおぎゃー」

私は泣き喚きながら暴れていました。両手足をバタつかせ、口内に溜まった唾を撒き散らしながら手に収まった物をひたすらに放り投げています。背中の中のシャツがバサバサと音を立てて波打ちました。

「おぎゃあああああ」

その中で唯一手にした猫のぬいぐるみはお気に召したのでしょうか。自身の顔まで引き寄せると、その猫を絶えず睨み付け始めました。それは、特に何の変哲も無い猫のぬいぐるみです。これといって汚れも見当たらず、高価な物にも見えません。私にはそれに興味を示す意味が良く理解できませんでした。

しかし、その猫の顔に付いた模造の瞳をじっと見つめていると、何故だか私まで不思議と懐かしさの様なものが込み上げてくるのです。何故なのでしょう。

終えず猫を睨み続ける私とそれを訝しむ私。

しかし唐突に私は、その猫を小さな口で頬張ると、歯の無い口でしきりに噛み付きだしました。愛らしい猫の顔面が、見る間に私の唾液で汚されていきます。

『やめなさい——！』

即座に気付いた私はしきりに訴えかけたのですが、その私は一切聞く耳を持っていないようでした。それもそのはず。私の声が届く訳はないのです。何せ私が声をかけたのは私からです。

その間にも猫は顔面のみならずその全身を唾液で染め濡らし本来あった色を失うと、仕舞いには宙を舞い、足下の格子に叩きつけられ

てしまいました。

『猫……』

無残に変色し、放り捨てられた猫のぬいぐるみ。あそこまで汚れてしまうと、そのうち回診にきたナースにでも捨てられてしまうのでしょうか。

私は自身の暴走で揺れ動く視界に不快さを感じながらも、胸中で静かにお悔やみの言葉を捧げます。

（……とても短い付き合いでしたが、目の保養にはさせていただきました。いつかまた、リサイクルされて復活する日を心待ちにしています）

私は猫を放り投げ、幾分か満足したのでしょうか。静かに四肢を丸めて眠りにつこうとしています。

（寝たり無かったのでしょうか……？）

ふとそんな疑問が募りましたが、どちらにせよ今の所起きる気配はなかったので私は別段気にも掛けませんでした。

暫くすると、私は赤子独特の静やかな寝息をたて始め、そのまま目を閉じ眠りについてしまいました。

（ようやく私の時間が来ましたね……）

意識が戻ってからこれまでの間、私はその一部始終をどこか——高みから見物していました。暗に私は気付いていたのかもれません。さもなくばこれほど冷静でいられる訳がありませんでした。

私の中に私とは違う、全く別個の誰かがいるという異常極まりな

い事実。正直俄かには信じ難い事です。しかし現に、起床と同時に私の身体は一指も自由に動かす事が出来なかったのです。そう納得する他ありませんでした。

今し方眠りについた彼には、この事に気付いている様子は一切見当たりません。まあ気付いていた所でどうしようもないのでしょうか。

半開いた唇の隙間から微かに吐息を漏らしながら、小さな指を一つ一つ、ゆっくりと折り曲げていきます。親指から小指にかけて、右手から左手にかけて。確かめるように幾度も手に拳を作ります。少々痺れましたがなんとか動かせるようでした。

――詰まる所、彼が眠っている間のみ私は自由に活動できるのです。

（それにしても、あの時の騒動には参りましたよ。本当に……）

私は自由に動かせるようになった身体にすこぶる満足し大きく寝返りをうつと、つい3時間程前に起きた騒動を思い出し、胸の内です静かに溜め息を吐きました。

今から約3時間程前、薄暗い病室の中で私の何かに驚いた母は、突如凄まじい悲鳴を上げて叫びだすと、鉄格子の上から両手を伸ばして私の首元に掴みかかろうとしてきました。

何故母は驚いたのか。何故自分の子である私に敵意を向けたのか。何一つ分らず呆然としていた私は、逃げ場の無い寝台の上で硬直していたのです。

あの時の母の形相はどこか、恨みや怨念の様なものを帯びていた気がします。恐らく私は殺されそうになったのでしよう。

しかし、母の震えた手が届く寸前。顔を歪めながら身を引いていた老婆が、母の奇行に気付かれたのか、突如大慌てで止めに入ってくれました。お陰で、何とか惨事にはならず済んだ次第だったのです。

母はその後、駆けつけてきた当直の医師数人と夜勤のナース達に抑えられ、老婆と共に何処かへ連れて行かれました。何処に連れて行かれたのか定かではありませんが、老婆が同行していた事もあつてか、さほど心配にはなりませんでした。何故ならば、その時の様々な会話内容の一端で、あの老婆が私の祖母で母智子の母親である事が判明したからです。

祖母は母に同行する前、私にそつと歩み寄ると、目を細めながら優しく頭を撫でてくれました。

橙色の灯りに照らされて浮かび上がった祖母の顔。口元は微かに弧を描き、小刻みに震えた目蓋の裏にはじつと私を見据える真黒の瞳。

そう言えばその時の祖母。私にはとても怯えている様にも窺えませんでした。何故そう感じ取れてしまったのかひどく曖昧でしたが、確かに私の目にはそう映ったのです。ならば祖母は一体何に怯えていたのか、不本意にもその場では分かりませんでした。

分厚い祖母の手に撫でられ、密かに安らいでいた私にとっては、さほど気に懸かるものではなかったのかもしれないし、何よりもまだ生後数時間程しか経過していなかった身体の節々が悲鳴を上げ始めていたので、早々と眠りにつきたかったのです。

数多の疑心に駆られながらも渋々と寝台に背を預けた私に、祖母はくぐもった声で言いました。

「今日見た事は忘れて、ゆっくりとおやすみ」

細々とした祖母の目が、私にはどこか遠くを映している様子にも感じ取れたのです。

第2話

「成^{せい}くんー。成くん……おい成ちゃん！」

唐突に、耳元で囁かれた声。聞き覚えの無いその声を私はすぐに訝しました。

（……誰でしょう？ 誰か訪ねて来られたのでしょうか？）

「おーい、成ちゃん。生きてますかー！」

「聴こえてますかー！？」

次第にその声は音量を増し——どうやら声の主が私の直ぐ真近まで来ている事が分かりました。一体全体どこのどちら様でしょうか。赤子の鼓膜はとてもデリケートなものですから、もう少し丁寧に扱って頂きたいものです。

それにしても……せい？ 私の苗字はせい云たらののでしょうか。目を閉じたまま、その暗闇の中で私は小首を傾げます。そう言えば、生み落とされて此の方、私は下の名前以外を耳にした事ありません。

（せいといいますと……特に何も思いつきませんね）

多少気にはなっていたのですが、よくよく考えれば私にとってそれは些細な疑問に過ぎませんでした。何故ならば、苗字などは何れ、親類か母達にでも聞けば直ぐに教えてくださるでしょうし——或いは祖母の時の様に、会話の節々から案外すんなり聞き取れるものだ

ろうと思っていたからです。

私は耳元で高鳴った声に構わず、依然として目を閉じたまま、思案に耽り続けます。

（今の私は——何故だかとても疲れているのです。もう暫し休ませていただきますしょう。）

私はあの彼が寝入ってからというものの終始、頭を悩ませ続けていました。

それもそのはず、夜の騒動の件もありますし、あれから母達と一度も顔合わせをしていないという現状も懸念の一つです。更に言えばこの私、宮人には奇怪な分身が存在するという事実。

そして——今最も私を悩ませ続けていたのは、なぜ私はその事にこれ程まで拘っているのか、という些か珍奇な疑問だったのです。……何故でしょう？ 翌々考えてみればとても不思議で、意味のない気苦労なのです。なのですが、この可笑しい疑問に私はずっと、得体の知れない胸騒ぎを感じていたのです。

「まーた爆睡モードですかい……仕方ない……ふうつつとっ！」

（貴方まだいたんですか……用はお済になられていなかったのですか？）

「せいやああああっ——！」

（ん……！？）

その声と同時に、背中に泥水が伝う様な悪寒が走った私は、瞑っていた目を瞬時に開けて、即座に背後を見遣りました。するとそこ

には『はちみつレモン』と書かれた掌サイズのペットボトルを振りかぶった少女の姿。更に、直後には透き通った雌黄色の液体が――私目掛けて粗雑な放物線を描いていました。

「ひっ――！」

堪らず私は身を竦めてかわします。すると放物線を描いていたその液体は、私の頭上に飛沫を散らしながら通り過ぎて行きます。間を置かず、手前にあった無人のソファ―に激突し、盛大な水飛沫を巻き上げました。足元に雌黄色の水溜りが広がっていきます。

「何事ですか!？」

私はそれで即座に立ち上がり、背面に佇んでいた少女を見下ろしました。

空になったペットボトルを逆手に持ち、非道にも私に飲みかけのジュースをかけてきたその少女の風貌は、しかしどこにでもいる様な極普通の女子学生といった感じでした。制服の襟元で綺麗に切り揃えられた黒髪。長めに整えられた肩。均整のとれた顔には化粧の跡等は見受けられません。朱色に縫われた制服の胸元にはギリシャ文字の刺繍が施されたえんじ色の五角形校章が嵌めてあります。

少女は未だ啞然とした表情で、じっと私を見据えています。首をしたたかに振ると、静かに呟き始めました。

「なっそんなはずが……あの鈍臭い成ちゃんか」

失礼な少女ですね。初対面で早々に鈍臭いですか。しかも、挨拶代わりに蜂蜜レモンをかけてくる程の奇功ぶり。一体どの様な教育

を……そもそも本当に教育を受けているのでしょうか。

それにこの少女。一体私とはどういった関係に当るのでしょうか。
やはり親族内の誰かなのでしょうか。

「どうしよう。これやばいよ」

私は少女の声と視線が示す先に誘導されるように足元を見下ろしました。そこにはやはり、依然として変わらぬ雌黄色もとい蜂蜜レモンの水溜り。仄かに酸味の効いたレモン臭が付近に立ち込めてきました。

「そもそも、貴方がしでかした事でしょ……ハンカチ等何か拭く物は持っていますか？ 生憎と私は持ち合わせていませんので」

「ごそごそポケットを弄りながら、呆れた口調で少女に聞きます。

「えーと……うーと……ない……」

その答えに私は盛大に溜め息を吐きました。

「……私が片付けておきましょう。貴方はそちらのソファで寛いでいてください」

「あ、はい……あれ……あれ……ってええ!？」

少女の動揺に少し疑問を抱きながらも、無人のソファを指差し、そこに少女を促します。そうして、早々に手の空いた看護婦を探そうと、私が一歩足を踏み出した所で何故か少女に前を塞がれてしまいました。

「ちよつ、ちよつとちよつとどうしたの成君。……もしかして怒った、怒ってるんでしょ？ ……ごめんなさい！」

（それはまあ、普通なら怒ると思いますが……）

「謝るから許してよー。私の癖なんだよこれ」

（見知らぬ人に飲みかけのジュースをふきかけるのが貴方の癖ですか……というかもうそれは癖といより貴方の趣味では？）

「どうしてもって言うなら、これから一生ちゃん付けなんてしないから……いやわかってます、もう絶対しないよ、うん」

そして何やら見当違いの事をおっしゃっています……この少女は、ボケているのでしょうか。華麗な突っ込み待ちでしょうか。私には少女の意図する所がさっぱり分かりませんでした。返答に窮した私は仕方なく、その少女に向けて涼やかな笑みを捧げました。これで大抵、女性の心は安らぐはずなのです。

「いやああああ。やっぱり怒ってるうううううう」

しかしながら、私の予想に反して少女は怯えてしまいました。

いやはや……この少女には逆効果でしたか。仕方がないですね——無視しましょう。

私は両手で頭を抱えながら俯いてる少女を無視し、直様彼女の横を通り過ぎます。そもそも、今の私にはこんな些事よりも、もっと率先してすべき事があるのです。

それは——足元に振り撒かれた蜂蜜レモンの液体を早々に拭う事

です。潔癖症の私と致しましては、この手のべとつき易く落ち難い汚れが非常に嫌いなので一刻も早く拭浄してしまいたかったのです。

「元の成君にもどつてよー……ごめんなさいって……」

「……分かりましたから、暫しそこに座って休んでいて下さいよ。後の事は私がやりますから」

私は再び、空いたソファアを適当に指差して、そこに座るよう促します。

「はい……うつつ、怒ってらっしゃる」

少女は終始うなだれながらも、どうにか手近なソファアに腰を落ち着かせてくれた様です。それを尻目に私は再び、手の空いた看護婦を探す為、室内をざっと見渡し——ようやくその異変に気付きました。

第2話（後書き）

いつも足跡残して下さる方々ありがとうございます。

近々推理ジャンルに移行させていただきます。3〜4話目辺りで移行予定ですので、今後もお読みいただけたら幸いです。

第3話

人間に、もとい生物に自我、或いは意識が芽生える時、その境界は一体どこに存在するのでしょうか？

我々が無意識下から意識下へと転ずる発端、鍵はどこにあるのでしょうか？ そしてそれは起こしているのでしょうか、それとも起こされているのでしょうか？

もしも後者であるならば、私達人間は無意識という名の下に造られた粘土細工に、操られているに他ならないのです。

「ここは……どこですか……？」

部屋が変わっていました。内装が変わった等の次元の話ではありません。私が元いた病室がその面影一つ残さず、一見してサイズの異なる別の場所に摩り替えられていたのです。

綺麗に配置された薄緑色のソファの数々。視界一面に広がる真っ白な壁。そこに幾つも貼り付けられた様々な注意書きのポスター。奥のソファで散り散りに座っているのは、見舞い人もしくは来訪患者の類いでしょうか。皆一様に俯き、じっとしています。見覚えの無いこの場所に、私は戸惑いを隠せませんでした。

そして、何よりも私の目を見開かせたものとは――

「これは……誰ですか？」

――私自身でした。

長く伸びた指先、胎児の数倍程もある掌、細々としながらも筋力の感じられる四肢。そのどれもが、およそ新生児にはありえない体積を顕示しています。

更に、今私が身に着けているのは、これまた着用した覚えのない朱色の服。胸元に嵌められたえんじ色の校章から、後ろの少女と同

じ学校の制服である事が判断できました。

しかしながら、やはりそこに私の知り得る本来の景色は一つもありません。それに――

「何故今迄気付かなかったのでしょうか……私は頭がいかれてしまったのか!?」

――私の認知力にもおかしな点が多々あります。

ここまでの変革を目に入れておきながら、今の今迄疑問一つ抱かずにいた私。その間約10分程。常人ならば、余程視野の枯渴した者でもない限り、即時に気付くであろうその異常性に、私は10分もの間気付きもせず、のほほん気儘に見知らぬ少女とくだらない口論を交わしていた事になります。

……口論かどうかはさておき、現状、今の私には立ち止まり、気付いてしまったこの異常性に頭を掻き回す事しかできなかったのです。

「ねえー成君ー早く拭かないと落ちなくなっちゃうよー? 成君いかないなら私が呼んで来るよ看護婦さん」

私が目前に広がる異常性に困惑していると、そんな事など齒牙にもかけない少女が、後ろから催促の声をかけてきました。早くしろ、との事らしいです。

(……喧しい少女ですね)

不覚にもそんな言葉が脳裏を過ぎり、つい口から零れ出そうになりましたが、あわやの所でその言葉を飲み込み抑止します。元より、私が言い出した事です。手早く済ませてしましましょう。

「――今行きますので、もう暫しお待ち下さいよ、お嬢さん」

僅かに悩んだ後、それだけ言い残して、直ぐに私はその場から離れる為、足を速めました。後方から「ひいひい」やら「いやああああ」やら不可解な悲鳴が聞こえてきましたが、気に留めていても時間の無駄と判断すると、奥に見えていた二つの曲がり角の内、片側を選んで進み、当初の目的(暇そうな看護婦さん)を探し始めました。

意外にも、その目的はすぐに果たされました。

待合ホール奥の曲がり角を左に折れて、人気の無い寒々とした廊下を直進した先。その突き当たりにて、天を仰ぎ見ながら首筋に中指を軽く当てがっていた、容姿からして若年の看護婦。

その看護婦は、私が声をかけようと近づくよりも先に、目を瞬かせながら面白い物でも見つけたかの様に手を叩くと、駆け足で近寄ってきました。

「あらあ……？ 成一君^{せいいち}、今日は定期診察あつたかな？」

看護婦の声は来院者に向ける業務的なものではなく、旧来の友人に語りかけるような、とてもフレンドリーな声色をしていました。

しかし——診察、ですか？ なんのことでしょう……。予期せぬ言葉に私は首を傾げながらも、率直に用件のみを淡々と並べていきます。

「お勤めご苦労様です。今日は検診の日ではないですよ。私用です。それより看護婦さん、待合ホールのソファを一つ汚してしましまして……ご多忙な所申し訳ありませんが、清掃用具をお貸し頂けますか？」

現状では未だ、私の状態は未知ですからね——相手が何者にせよ、こうして調子を合わせておけば問題ありません。

看護婦は私の用件に対し、一瞬驚いた様に顔を硬直させていましたが、直後には軽く苦笑しながらも答えてくれました。

「ふふっ……はいはい、今持つてくるから少し待つてね。……ていうかさあ、成一君。用事あるんなら先にそれ、終わらせちゃいなよ。後は私がやっておくからさ」

どうやら人の良さそうな女性に巡り会えた様ですね。

「いいいえ、私がしでかした不祥事ですので、看護婦さんにごめいわ……」

「だからあ。そうゆうのはいつも私達の仕事だつて言ってるでしょ？ 成一君だつて一応患者さんなんだから無理しないの。それにし

ても……ぶつくつくつ」

……？ 何か可笑しな事を喋ってしまったのでしょうか？ それとも、私の挙動に粗末な箇所があったのでしょうか？ 看護婦は桜色のしなやかな唇に、丸めた両手をあてがいながら、クスクスと笑い出してしまいました。

「あの、ですね……そうして笑われていると、こちらもなんと対応してよいか……」

私の言葉に反応したのか、看護婦は更に声を高鳴らせて笑い出します。

「あーははははは……ひいっひいっふー……ごめんごめん。だって成一君のその口調、なんか可笑しくてさ……ふふふっ、それに成一君、ソファー汚したのって、どうせまた伊留美ちゃん^{いるみ}でしょ？ さっきの台詞……ふふっ、なんか身内の人みたいで」

「はい——？」

伊留美……とは恐らく先程の少女を指しているのでしょうか、少女は私の身内だったのでしょか？ しかし、みたい、ともおっしやっています。どちらが正確な情報なのでしょうか。

目を躍らせながら、必死に情報の整理をしていると、看護婦は微笑み手を振りつつ、

「じゃあ、看護婦さんはもう行くけど、成一君も早く安静にして身体を休めてね。アデュー青春ボーイ！」

そう言って、手近なドアの中へ颯爽と消えていきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9851f/>

ブラックバブー

2010年10月28日07時08分発行